

偉大な先輩 - 座光寺公明氏 (1958~1987) の思い出 -

森 ふみ代

その報は、友人からの電話で知りました。
座光寺さんと同郷同学年の作曲家小林隆一氏 (1958~) から連絡があった、と、その事実を彼女は伝えてくれたのでした。

座光寺さんのデスマスクは今でも鮮明に覚えています。
あの顔は、生前の彼とは別人でした。青白くて小さくて……。当たり前ですが、死者は目を開ける事もなく、眠っているわけでもない。まぶたを閉じ、微動だにしないあの顔は、生前の座光寺さんとはあまりにかけ離れていました。彼の枕元には、奥様の悦子さんが、伏せ目がちに、弔問客の一人ひとりに丁寧にお辞儀をされています。そして、座光寺さんが倒れられた時、彼が出席していたホームパーティの主催者であったピアノの恩師松谷翠先生 (1943~1994) のご家族が列席され、とりわけ、松谷家の二人のご子息 (松谷レオ君、松谷冬太君) が号泣していたのが印象的でした。

そんな光景を目の当たりにしても、お父上の弔問客への挨拶のことばを聞いても、やはり私は、彼の死が実感できませんでした。なぜなら、私は大学を離れて数年が経ち、日常において彼の姿を見ることもなく、身近な存在ではなくなっていたので、彼を亡くしても、私の生活そのものに及ぼす影響はほとんどなかったからです。

あの日から、どれだけ年月が流れたことでしょうか。私は、いくつかの仕事を経験し、結婚もし、子供をもうけて、東京から名古屋へ居を移していました。2007年7月、そんな私が、ある偶然から上京し、明大前で人と会う事になりました。明大前の駅前で、私は胸が締め付けられるような感慨に打たれました。ここは確か、座光寺さんのご実家があったところ……。

当時の記憶が蘇った私は、帰宅後、すぐにインターネットで検索しました。そして、このホームページを発見し、20年ぶりに彼の雄姿を見ることになったのです。

この度、悦子さんのご依頼により、大学時代のエピソードを書くことになりましたが、この文を書くにあたって、ためらいもあります。なぜなら、物理的にある程度の時間を過ごしたからといって、その人間を良く知っているとか、理解している、という事にはならないからです。その上、当時の私は音楽的にも人間的にもまったくの未熟者でしたので、座光寺さんの能力の高さに気づく力がありませんでした。むしろ座光寺さんの享年をはるかに上回る今になって、そして、このホームページの隅々を読んでいく事で、彼を再発見し、その作品の素晴らしさと評価の高さを知った、と言えるに過ぎないからです。

しかし、その私がわずかな記憶を頼りにエッセイを書く事で、彼の人となりや少しでも伝えることができ、ホームページ上で彼が生き生きと蘇るエネルギーの一端になるのならと思ひ、僭越ではございますが書かせていただく事にしました。以下は、私が大学入学時に既に最高学年4年生であった、座光寺公明氏の思い出です。

彼は、軽量級の柔道家のような引き締まった体躯を持っていました。少しがに股で黒っぽいパンツに雪駄、というのがお決まりのファッション。首をかしげて、眉間に皺を寄せ、考え深げな風貌は近寄りたくもありませんでした。しかし、何か可笑しい事に合うと、その深刻そうな顔があつという間に崩れてしまう。ヒッヒッと、引きつけるように笑って、止まらなくなってしまう。と思えば、雨に濡れた子犬のように心細げな目をしたり、そうかと思うと、同じその目にメラメラと炎を燃やして、課題に取り組んだり。感情表現の豊かな人なのだという事は、ほどなくわかりました。むしろ、そういう敏感

な自己を防御するためのポーズが、あのベートーヴェン顔だったのかもしれない、と今は思います。

私達、下級生の前でも十八番の宴会芸『花火』は、乞われるままに披露してくれました。また、新入生数人を自宅として使っていたマンションに招いてくれ、深夜まで音楽論を語り合い、先生や先輩の噂話で大いに盛り上がったこともあります。

苦学生だった彼は、深夜のバイトで睡眠時間が4時間と話していましたが、4年生なのにはほぼ毎日学校に来ていて、自分のピアノの練習、声楽や管弦楽器など他コースの学生との伴奏合わせ、それらの空き時間には「遊び」と称して即興演奏や連弾などをして、結局、午後9時の閉館ギリギリまで練習棟にいたことが多かったように記憶しております。そう思うと、彼の創作時間はいつだったのか、まったくわかりませんが、気がつく署名入りの立派な作品が出来上がっていて、「ほらっ」と新作を誇らしげに抱えて見せてくれていました。

彼のピアノは、本人曰く『スポーツピアノ』で、「手の大きさが足りない分、ポジション移動を速くしている」と、目にも留まらぬ速さで腕を根元から素早く移動させます。そのようにして、一気に掴めない広い音域の和音をカヴァしたり、もしくは、音が激しく飛び、不協和音が連続するような現代曲を演奏するのです。まさしくスポーツのように、ピアノと格闘するような熱の入った練習で、室内の温度も湿度も急上昇。弾き終えた彼が、練習室から出てくると、その体から湯気が立ち上るように見えたものです。

どうしたら、あんなに速く、激しく、確実に弾けるのだろうか？なんて、ドアの覗き窓からこっそり見ていると、そういう気配はちゃんと察知するらしく、入ってきていいよ、と合図をくれた事もあります。でも、中で聴くと、練習室のボロピアノじゃ、彼のタッチは受け止め切れない。ビーンビーンとピアノが妙な音を立てていたかと思うと、パ〜ンッと大音響でピアノ線が切れてしまった事もあるくらいです。本人は、初めてのことでなかったようで、ヘラヘラ笑っていましたが、私は本当に驚きました。アップライトピアノ程度だと、彼のタッチの反動や振動で、ガタガタと本体が揺れてしまいます。その位、激しく弾きこむのです。

スキー合宿の時は、彼は上級者グループを教えていました。後で、そのグループと一緒に座光寺さんと滑っていた友人（北海道出身でスキー1級）が、「あの足腰は、只者ではない！」と、興奮して話していたので、相当の腕前だったのだと思います。その時も、自分が指導に入る前の早朝や、指導後のナイター時間に、自分のスキーを滑っていたようです。同じ合宿に参加していましたが、宿舎で彼の姿はほとんど見かけませんでした。でも、朝食後に外に出ると、誰もいないゲレンデの天辺からすごい勢いのウェーデルンで落ちるように滑走してくる人がいて、誰かと思ったら、座光寺さんだった、という事がありました。あのピアノと同じ。その勢いはちょっと説明ができないほどです。なので、賞賛とか感嘆というよりも、まるで見てはいけないものを見てしまったような、バツの悪い気持ちにさえなったものです。

そんなケタ外れに豪放な面を持つ方でしたが、彼の書く字はとても小さくて、判読するのに苦労しました。同様に、彼の作品も計算されつくした精緻なものでした。何か問題が起こったときに、いきなり紙と鉛筆を出してきて、沢山のボックスと線を描いて、あらゆる可能性を計算し始めた事を覚えています。それは、いくつもの yes と no を繰り返して、最後に結果に辿りつく占いのようでした。彼の思考が私の目に見えた瞬間でしたが、一気に書き上げたその速さと選択肢の多さに驚き、その時のテーマである問題が一時的に私の頭から消えてしまったくらいです。それは、彼の思考の質と表現法を象徴しているように思われました。何か、彼の内からものすごい勢いで吹き出てきて、その激流に負けじと肉体を駆使して取り組むのですが、人並みはずれたそのスピードさえ、

彼にとってはもどかしいらしく、更にスピードアップしていこうとする意思が、身体を突き抜けている感じです。そのように極限まで集中力が高まって仕上がったものは、いつも職人のように丁寧で手の込んだ細かいものでした。

演奏会前は、緊張した気持ちが彼の体からほとぼしっていて、ピリピリした神経の尖りを感じました。彼の周囲に人を寄せ付けない特殊なバリアーが張り巡らされているかのようで、それは、彼の作品発表に賭ける情熱が並大抵のものではない事を示していました。一方で、音楽を思う、音楽を語る、その時の彼の表情は、瞬く間に変貌します。音楽に憑かれ、酔い、そして思考する。つまり、ロマンと理知が同時に感じられるのです。そして、一般的な人間であれば両極にあるかもしれない異質なものが彼の中では接近して、交差していたような気がします。でも、それぞれにきちんと境目があって、溶け合っているわけではない。各々の輪郭がしっかりあって、しかも同時に表出してくることさえあるのです。静であり動でもある。非常にエネルギッシュでありながら、太陽よりも深海の静けさが似合う、そんな印象を、私は持ちました。

そして演奏会が終わった後は、いつも満足げで、たとえ演奏者がベストでなかったとしても、必ずその労をねぎらっていました。そして、その後の飲み会では、またまた『花火』の出番です。『花火』は、どじょうすくいの上向きのような振り付けなのですが、演技前に一瞬の静寂があったかと思うと、その直後、豹変した演者は、大声で叫ぶように歌いながら、人が変わったように激しく踊るのです。宴もたけなわ、そのような時間帯に、他の先輩達が、「座光寺～！」と声をかけたら、それは『花火』のリクエストなのです。座光寺さんは、今日の各作品の批評や演奏会の反省などで難しい顔をしたまま、「え～、どうしようっかな～？」と、必ず迷うのですが、結局やっぺてしまいます。「ド～ンと出た花火がきれいだな～、空いっぱいひろがってえ～」と……。先輩達は皆、笑い転げていましたが、私達後輩は、ただあつけにとられて見ていました。そして、そのうち、その『花火』の勢いに当てられて、引きずられ、引き込まれ、最後はお腹が痛くなるほど笑ってしまうのです。

バリバリの現代音楽作曲家と、その芸『花火』の落差は、今、思い出しても意外性といい、あの田植え風の足腰の動きといい、笑わずにはいられません。そして、そんな思い出をくれた、特異なる個性、座光寺公明氏の天賦の才をそこにも感じてしまうのです。

以上が、私の記憶にある大学生時代の座光寺氏のエピソードになります。ここからは、このホームページに出会い、再び彼の音楽を聴いて心に浮かんだことを書いてみたいと思います。

弦楽合奏のための前奏曲『亡き人の為に』(1982) [Prelude for Strings](#) (Op. 20) を聴いた時は、生前の彼がこんな事を話していたのを思い出しました。彼が、まだ旭川に住んでいた頃、[サミュエル・バーバー](#) (Samuel Barber 1910～1981) の弦楽のためのアダージョ Adagio for Strings Op. 11 (1937/1938 初演) を、札幌交響楽団の演奏会で初めて聴いた。非常に感動したが、アンコール曲だったため、題名がわからなかったので、即席で楽譜を書き、「この曲はなんという曲ですか？」と師事していた [木村雅信](#) 先生 (1941～) に聞きに行った、という話です。このアダージョ はその後、映画『プラトーン』(1987) にも使われ、今でこそ広く知られているかと思いますが、当時 (1980) は、バーバーという作曲家も馴染みがなく、LPレコードを入手するのに苦労した覚えがあります。そのLPで Adagio を聴きながら、「こんなに旋律や和声の美しい曲が書けるのなら、調性だって構わないんだ。」って言っていたのが印象に残っています。当時の彼は調性を離れた語法を試していましたから、調性の曲には興味がないのだとばかり思っていたので、意外な感じがしました。そのアダージョの影響があるのではないのでしょうか。

このホームページには、作品番号以前の習作が、スペインの作曲家[Llibert López Pascual](#) 氏の協力によりコンピューター演奏でアップされています (Hiroaki's Earlier Works) が、少年時代の作品とはいえ、座光寺さんと調性の曲という組み合わせが、私にとっては新鮮でした。美しくロマンチックな響きがしますね。中でも[Scherzo](#) (1973) は、送ってもらった楽譜ですぐに練習したくらいのお気に入りです。また、最近アップされたチャイコフスキー作品 ([Symphony No. 6 Mov. 4 Pathétique](#)) のピアノ編曲版も好きです。

『天宇受女』(1980) [Ame-No-Uzume](#) (Op. 4) は、大変懐かしく聴かせていただきました。新作・日本歌曲の会(1980)という学生の作品発表会で聴いたことがあります。これは、舞踏音楽として書かれたように記憶していますが、1984年に改訂されて、華やかさと厚みが増したように思います。いつか舞踏付き『天宇受女』が初演される日が訪れる事を祈っています。

フルートやチェロという楽器は、大学時代から信頼のおける演奏者に恵まれ、すでに名曲といえる作品が、在学中にも生まれていたと思いますが、その後も数々の作品 ([Variations for Solo Cello](#) Op. 16, [Monodia](#) Op. 31, [Chamber Cello Concerto](#) Op. 29a) が作曲されていた事を知りました。どの曲も聴き応えがありました。

更に、ギター ([Mono-morphology II](#), Op. 27) やハープ ([Composition V](#), Op. 26) にまで室内楽の領域を広げていたとは、彼の探究心の賜物だと思います。個性ある弦楽器の新たな奏法や響きを模索していたのでしょうか。この2曲は、美しい旋律や、興味深い奏法が、飽きさせる事なく聴衆を引っ張るような気がします。

組曲—古楽器のための— ([Suite for Traditional Instruments](#) Op. 34) もおもしろい試みです。西洋の古楽器を用いた三重奏なのですが、トラベルソ (Traberso) の素朴な響きが、尺八を思わせる旋律や奏法にとっても合っていて、それにチェンバロ (Chembalo) の怪しげな乾いた音がからまり、リズムを刻む所はまるで電子音に聴こえてきます。この中で、もっとも西洋の響きを保っているのがヴィオラ・ダ・ガンバ (Viola da Gamba) ですが、この3種の楽器の組み合わせの妙と、和であり洋であり、古式ゆかしき中にもミニマムミュージックの要素あり。楽器や音楽の可能性を追いかけながら、美しいものを作ろうとしていた彼の気概を感じ、非常に心惹かれる作品となっています。

尺八、箏、([Composition II](#) “MYO” Op. 11, [Composition III](#) “KE” Op. 13) これらは行くべくして行ったな～、と思える路線です。ここで、座光寺氏、小林氏が、何故、日芸に入学したか、という話に繋がってくるのですが、彼らが北海道で師事していた木村先生は日芸の[貴島清彦](#)先生 (1917～1998) を非常に尊敬していた、という話を本人から聞いたことがあります。日本のクラシック音楽界は芸大を先陣としてドイツ音楽主導で発展してきましたが、日芸では、作曲科必修の和声学では、フランスのテオドール・デュボア (1837～1924) や[オリヴィエ・メシアン](#) (1908～1992) を学び、他の音楽大学が常識的にドイツ和声を採用しているという流れの中では、一線を画していました。そして、私の恩師である峰村澄子先生 (1941～) をはじめとして、日本の伝統音楽 (雅楽・能楽等) の特性を生かしながら独自の語法を編み出すという動きも、早くからあったのです。当時は、宮内庁楽部の[岩波滋](#)先生 (1941～) や民族音楽の[内田るり子](#)先生 (1920～1992)、西洋音楽ではハイドン研究の世界的権威[大宮真琴](#)先生 (1924～1995) もいらしてました。日芸の垣根のない自由な校風と、諸先生方の与えてくださる音楽的刺激は、彼の才能を存分に開花、発展させる力になっていたと思われれます。

そして何より、現代音楽演奏の第一人者であったピアニスト[松谷翠](#)先生との出会い。

座光寺さんの演奏家としての資質は、多分に松谷氏と共鳴し合ったのでしょ。在学中はもとより、師弟の境なく家族ぐるみでおつき合いされていた点などから、伺い知る事ができます。そう思っれば、彼のピアノ演奏のスタイルや奏法は、ほとんど松谷氏と見まがうばかりの類似点が見出せるのではないでしょか。このHPでは、[エリック・サティ](#) (Eric Satie 1866-1925) の「梨の形をした三つの小品より 3. 動物的に」 ([Trois Morceaux en Forme de Poire](#), 1903) がダウンロードできますが、共演者はこのエッセイの冒頭に出てくる小林氏です。二人の腕のいいピアニストは、両者とも松谷門下でした。ピアノ科が弾かないような曲を、二人がどんどん発掘して先生に持って行って、先生もいくらでも応えられる方でしたから、当時の松谷クラスは一種異様な活気がありました。当然のように、先生も座光寺さんも小林さんも、現代音楽を含めた西洋クラシック音楽はもとより、ジャズ、即興演奏、なんでもござれで、音楽的キャパシティは広いし、軟弱な音楽家のイメージを払拭するようなパワフルな奏法は特徴があつて、あのクラスの雰囲気も他の音大にはなかったのではないかなあ、と思います。

[ガーシュイン](#) (Gershwin 1898-1937) の作品演奏 [Gershwin, Piano Prelude No. 1-3](#) やモーツァルト (Mozart 1756?-1791) の作品をモチーフにしたピアノ曲Ⅲ ([Piano Piece III](#) .Op. 36) では、練習棟での「遊び」を思い起こさせてくれました。これらは、彼の音楽的「遊び」の領域、と思われま。但し、ピアノ曲Ⅲには作品番号がつけられていたので、座光寺さんの意図をはかりかねていますが、もしかしたら彼は、ニュークラシックのはしりの時を敏感に掴んでいたのかもしれない。

このホームページで、私は彼の音楽に再び出会いました。
懐かしかった。
でもそれだけではなかった。
彼の才能を確信する事ができたのです。
それが、このエッセイを書くことになった大きな動機です。

最後に、私は夫人がこのホームページを作られたことを非常に嬉しく思っています。同時に、座光寺さんはやはり既に亡き人であるのだ、その創作活動が29歳で絶たれてしまったのだ、と改めて確認することにもなりました。そして今は、このホームページをきっかけに彼を偲び、彼の作品を愛する人達が出会い続けていく不思議に、魅せられています。もし、この稚拙な文から、再び彼を思い出してくださる方がいらっしゃいましたら、是非、夫人にご連絡をくださいますよう、お願い申し上げます。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

2008年4月18日
彼の音楽を愛する者として